

平成 28 年 11 月 18 日

立命館大学校友会事務局 御中

東北応援ツアーレポート

氏名：村越 正幸

卒業年：昭和 62 年

卒業学部：経営学部

研修先	岩手県三陸沿岸（釜石市・大船渡市・陸前高田市）		
日程	H28.11.5（土）～ 11.6（日）	研修者	村越 正幸
目的	被災地復興状況など視察、並びに危機管理学習		

テーマ：「現地を訪問して想うこと」

まず、行程車中のなかでも申しましたが、今般、私が当ツアーに参加した理由は勤務先にて防災意識の啓発に取り組んでいることでした。既に当社では 3 名が自ら計画を立て岩手県、宮城県を視察した経緯があります。そのような状況下、折しも本ツアーのご案内を知り、校友の皆様と同行できるのであれば、会社の目的を有しながら、また違った経験ができるのではないかと思い応募しました。しかしながら一方で、訪問前は「自分が訪問して何になるのか」「震災から 5 年以上経った今において、見学とは失礼ではないか」「応援など偽善ではないか」など逡巡する気持ちもありました。そのような想いが交錯するなかで、11 月 5 日は奇しくも「世界津波の日」で、震災学習の冒頭、到着した釜石市では防災訓練のサイレンが鳴り響いていました。

訪問を終えた今、幾度となく使われ月並みですが、未曾有の自然災害は想像を超え言葉を失います。しかしながら、おそらく筆舌に尽くせない困難を受けた地元の校友、人々が力強く生きていることにかえて勇気づけられました。皆様のご教示は、平常時の心構えとしては「食料品、特に水の備蓄」「電灯、ラジオの常備、置場の確認」、被災時においては「自分の命は自分で守る」「自分だけは大丈夫とは思わない」という、地震対応手順などで接しているようなことでした。ただ、経験を通してのみに重みがあります。勉強会では震災後しばしば使われた「正常性バイアス」という言葉を思い出しました。災害の場合、手を掛けて結果小さければいいですが、逆であれば取り返しがつきません。有事の際の行動を身につけ、維持するには定期の基本的な訓練が肝要と再認識しました。今後の防災活動に活かしたいと思います。

自身、冒頭の想いについては、三陸鉄道の熊谷さん、校友の高橋さんより「皆

さんに来てもらえるだけでありがたい」という言葉を受け、この機会により払拭できたような気がします。今まで、岩手県には知人などおらず遠い対象でしたが、これから彼の地で何かの話題があれば、今回お会いした皆様方の顔を思い浮かべることでしょう。これは全く及ばずながら、勉強会にて平野さんが申された「情報と現実の一致」に近い感覚かもしれません。

最後に立命館校友会事務局、岩手県校友会、旅行会社、バス会社、その他表に出ないスタッフの皆様によるご尽力、お気遣いにて素晴らしく有意義なツアーに参加させていただき、加えて校友の皆様と懇親の場を持つことができたことに深謝申し上げます。

以 上